

私のシベリア物語より抜抄

新潟県 渡辺 幸三

ソフガワニ―上陸

終戦直後、千島松輪島を占領したソ連兵は勲部隊の松輪島守備隊を完全武装解除を完了。

ソ連軍の監視の下に明け暮れを過ごしていたが、九月二十五日、ソ連貨物船が松輪島大和湾に入港した。

ソ連兵は「ヤボンスキー、トキョーダモイ」（日本の兵隊は日本へ還るんだ）と私達にゼスチャたつぷりで話しかけた。

そして我々三千名はそのソ連船に乗船した。服装は冬支度と言う命令で、日中は暑さも感じる程なのだが、日本は物が無いからと、冬物は一品残らず身につけ、チリ紙、石鹼等も背のうにしばり付け、武器を持たない完全武装であった。

いろいろの想い出を残して松輪島を後にしてから数

日目、船倉から甲板へ便所に立った兵隊が、船倉の中へ突然大きな声を出して叫んだ。「オーイ、陸が見えるぞ」、船倉の兵隊は一樣にざわついた。ソ連兵の制止も聞かず、大勢が甲板に出た。陸は私達の手のとどきそうな所に左右に限りなく広がっていた。北海道出身の兵隊が、「あれは稚内の先端だ」と言った。

船はますます陸に近づいて来る。あと何時間後には北海道だ。「上陸したらまずキューと一盃だ」、話が甲板にどよめいて私達は食い入る様にその陸地を眺めていた。

ところが陸地が最も接近したと思う頃、船は突然方向を変えて北へ北へと向かって航行しはじめたのである。しかし私達は何かの都合でどこかの港へ行くのだろうかとうと都合の良い考えで不安を打ち消していた。

二日程経過した頃、下船準備の命令が出て甲板上に登ると、そこには今まで見たことのない風景が、顔前に開けていた。

小高い丘が左右に広がり、えぞ松林の中に白壁の家が点々と眺められ、「ポーポー」と汽車が丘の上を

走っていた。後でわかったが、そこはソ連領沿海州のソフガワニーという港であった。

下船すると岸壁の辺りにはソ連軍の女の兵隊が何やらおしゃべりをしながら私達を指差して笑っていた。そしてその向かい側には日本人捕虜が道路作業をしていた。もう先客がいたのである。

三千人の兵隊は幾組かに分けられ、汽車に乗せられた組もあり。私達は午後六時頃ソ連兵の監視の下に進をはじめた。

ただ黙々と歩いた。ソ連兵が「ダワイ、タワイ」（早く早く）と言いながら自動小銃を空に向けて発砲した。その自動小銃はマンドリンに似ているので、後々私達はマンドリンと言った。両側のタイガー（森林）が黒々と続いた。夜中二時か三時頃、大きな道からさらに小道に入ると、そこに三重にバラ線の張り廻された幾組かの平屋があった。

寒さの中で立ちつくしていると、その家（バラーク）の中から二百人位の囚人が剣付銃を持った監視人に追い立てられ出て来た。その後に私達捕虜が入るの

だ言う。

私達の組七百名位は、とにかくその収容所に入った。捕虜収容所は「カローナ」と言った。

ところが私達の分隊はカローナに入りきれず、止むなく、カローナの前の塲所に一人一人の携帯天幕を接ぎ合わせ幕舎をつくり、下に毛布を敷いて、ようやく寝ることができたが、背中がやたらに冷たく、体熱が地面に吸いとられる様な気がした。

寝付かれぬまま、明かした地面は早や凍りついていった。これからどうなるのか。

シベリアでの捕虜第一夜であった。

空 腹

私達が最初に取り掛かった作業は蒸気機関車の薪切りであった。びっくりした事は当時ソ連の機関車は薪を焚いて走っていたのである。

薪切り作業は、直径十センチから十五センチ位の樹を伐り倒し、長さ八十センチに刻んで、高さ幅一メートルにするのが二山で一人分のノルマであった。

ピラ（二人用鋸）で二人の意気が合わないとなかな

かうまく行かず、目の立たないピラを貰ったときは、いくら氣をもんでも、息ばかり切れるという状態であった。

そして時間になってもノルマに達しないと、カンボーイ（監視兵）とブリガジール（作業監督）が「ダワイ、ダワイ」（早く早く）を掛け、「ヨッポイマーチ」「ドラーク」とか聞くにたえない人非人呼ばわりの罵声を浴びせた。

私達は朝のうち一日分三百グラムのパンの配給を受けたが、ほとんどの人が一べんで食べてしまった。しかし胃袋のどこにパンが入ったのかわからない感覚で昼食の来るのが無情に待ち遠しかった。

午後一時頃、昼食のボーチカ（樽）を積んだ馬車が作業現場に来る。そこから柄杓で一杯を飯盒に受けて昼食を貰う。トロトロのカーシャ（お粥）は、いかなる時も柄杓一杯のみで、飯盒のふた六分目位であった。一〇八カロリーの生活が一月半も過ぎた頃、小隊毎や、四人五人と突然大隊本部に呼ばれて、あたふたと身の廻りをまとめ、どこか行ってしまう者が出はじ

めた。

見事に黄色く色づいた白樺の葉が一気に丸坊主になると、細い雪が毎日のように降り積もり、その雪は絶対に解ける事はなかった。

後でわかった事であるが、モスクワからシベリア縦貫のシベリア鉄道は、ハバロフスクが終点で、ハバロフスクからウラジオストクまでがバム鉄道という。そしてハバロフスクからアムール河北岸のコムソモリスクから分かれて、ソフガワニの支線が私達の作業をした場所である。

その辺のタイガー（森林地帯）は地面がツンドラ地帯で、苔が密生しブヨブヨして地下一メートルは万年水で夏もカチカチの凍土であった。

森には立枯れた大木が沢山あった。それを倒して細切りにすると、中から蜂の子のような白い幼虫が一ぱい出て来た。何の幼虫かわからないが凍ったまま食べると、シャリシャリと歯ごたえがあり、それを焼いて食べると、実に香ばしく、血と肉になるような気がした。

極限

シベリアの寒さは話には聞いていたが、身をもって体験するのは全くはじめてである。

十一月も中旬になると寒さが急に厳しくなる。雪が毎日降り、野も山も鉄道線路も一面が銀世界となり、積もった雪は翌年の四月まで絶対に消えない。

十二月中旬頃になると、ほとんど雪は降らなくなるが、温度は零下三十度から四十度になる。体感温度が零下六十度になった事もあった。

そして吹雪になると目も口も開けられず、防寒帽から出ている眼のまつげは白く凍って、またたきをするのとベタベタとくっついてしまう。

夢中で作業をしていると鼻の頭が真っ白くなって凍るので、お互いが見ていて知らせてやると血の氣の出るまでマッサージをするのである。

作業用の鉄棒や、スコップ等、鉄の部分を万一素手でさわるものなら、皮膚がくっついて、無理に取ろうとすると、皮が、その鉄の部分に剥ぎ取られ、赤身の手になってしまう。

十二月中旬から翌年の一月中旬までが一番寒さがきびしく、その中からも三寒四温が順序よく繰返され、四温になると、二、三度の差であっても、とても温かく感じて、せめてもの救いであった。また室内のペーチカの暖かさは、地獄に仏のようであった。

三寒に入ると寒さが急に下がって、零下四十度位になると、太陽は輝いて空は抜けるように青いが、大気が凍るといふか、一面に空が銀粉をまいたようにキラキラと光るのである。

しかし太陽は輝くばかりで少しも暖かくないのである。

寒暖計が零下三十度になると、作業が待機となって屋内で温度の上がるのを待つ。

ちょっとでも零下三十度未満になると、作業整列で出発させられた。しかし作業が激しくなるにつれて、零下三十五度でも作業に出された。

その寒さの作業ではとても能率の上がるものではない。収容所の便所は屋外にあるので、カチカチに凍った丸太をならべたところでお尻をだして用を足すより

仕方がない。

私たちは一樣に体が衰弱しているので、小便のしまりが悪く、夜中にも三十分おきに便意を催し、にわかつくりの二階の寢台からおりて行く途中にこらえ切れずもらしたり、入口辺で放尿した。

春になって氷が解けると、特有の臭いが立ち込めるのである。また冬期間の便所掃除は大変である。便所に積もった黄金は次々と盛り上がって凍ってしまうので、鉄棒でそれを欠いて、麻袋でモッコをつくり、收容所の片隅に穴を掘って、そこへ埋めるのである。

脱走者

飢餓と寒さと重労働の上に私達を悩ませたのがシラミと南京虫であった。一日中身体が無性にかゆく、作業の休憩時には、ジャンジャンと焚火して襦袢（シャツ）袴下（ズボン下）を交互に脱いでシラミ取りをはじめるのである。

栄養失調の身体の血を吸い取る憎いシラミは、胴や袖の縫い目になって白い卵がくっついていて、それをつぶすとピチピチと音を立ててつぶれた。

また南京虫は夜の吸血鬼だ。眠りにつく頃になると壁のすき間や柱の割れ目、寢台の木の裂け目から小ささまざまな南京虫がぞろぞろ出て来る。そして首筋や手首とか、足の出ている部分を食う。これまたシラミとは一種違った痒さがあり、ポリポリ痒くとその部分が潰瘍になり、いつまでも治らないのである。

つぶすと一種異様なにおいが立ちこめ、その吸血鬼はさんざん私達の安眠を妨げて、朝の起床三十分前頃にはまた元の巢へ戻るのである。

ある朝、ラスボード前（作業整列）に、ナチャリニク（收容所所長）（もちろんソ連人）が全員整列をかけた。通訳を通して、「昨日作業現場から日本人捕虜が二名脱走した。この寒さでは、山の中で凍死するか、狼に襲われるか他に道はない。諸君は必ず日本へ帰る事ができるのだ。日本には親や妻子が諸君の帰りを待っている。また逃亡して捕まったら三十年の刑でチヨルマ（囚人）生活をしなければならぬのだ。日本の兵隊よ、春になれば体も菜になるだろう。それまで頑張ってもらいたい」

あとで聞く話によると、自分達の防寒シャツ等をソ連人から四キロバン（黒バン）と物交して、それを食糧として満州へ抜ける計画で脱走したとの事であった。ちよつと頭がおかしくなったのであろう。

また、ある日、海岸沿いの鉄道線路のバラス詰め作業に行った。つい二か月前まで小波がよせて、岸边には昆布等が流れついていて、私たちは争って昆布を生のままかじったりした。

その海岸は水平線の彼方まで白く大山小山になって凍りついていた。空は青く、ただ突き刺すような海風が私達を打ちつけた。

突然ある一人が「オーイ樺太が見えるぞ」と東の方を指差した。私達には何の陸影もみえなかったが、彼は「お母さんこれから帰るよ」と、大きな声を出しながら、氷原を踏みしめながら彼は次第に小さくなり、ついに視界から消えて行った。「オーイ戻れ、戻れ」と声をからして叫ぶだけで、連れ戻しに行く気力も、走る体力も私達にはなかった。彼は樺太で今年六月に召集になった、十九歳の初年兵だとのことであった。

Mさん

Mさんは家ではトラックの運転手で、召集されて仙台の輜重隊に入り、自動車隊として松輪島に配属され、一緒にシベリア入りをした。

当年三十三歳で、家には六歳を頭に三人の女の児がいると聞いていた。隊では高年齢の方であるが、初年兵であった。

戦争末期は次期の初年兵が入って来ないのでいつになっても初年兵であった。ましてシベリア入りをしても、隊の雑用のため古参兵より数層倍働かざるを得なかった。

Mさんは、ポケットから家族の写真を取り出しては、北蒲原なまりで私達に話かけていた。しかし、マローズ（極寒）が襲って来るとMさんの体の動きがにぶくなって来た。

そんなある日、貨車からのバラス下ろし作業を終えて、トボトボと線路道を踏んでカローナへの帰途、Mさんは突然よろめいて前に倒れた。そしてあっけなく息が絶えていた。

その夜私達の班内で横たわった彼の死に顔は安らか
そうであった。情ない話であるが、涙も悲しい気持ち
もわかなかった。明日は我が身かという気持が感情を
無感覚にしたのだろうか。

炊事からの心尽くし、モカ（脱脂大豆粉）の枕団子
がMさんの枕頭に供えられ、缶詰めの空缶に燈油を入
れ、ボロ糸で油を浸した御燈明が一晩中またたいてい
た。お通夜をする人もなかった。なぜならば明日の作
業でちょっとした眠っておかなければならないから。

朝眠りをさますと、アッと驚いた。枕団子は誰が食
べたか一個もなくなっていた。Mさんのなきがらは、
いつの間にかどこかへ連れて行かれた。

翌日こんな噂が広がった。夜中に炊事場を歩く人の
気配がして間もなく飯炊き釜のふたを開ける音がする
ので炊事勤務者がランプを持って見廻りに行ったが誰
もいなかった。きっとMさんが飯を食べに来たのでは
ないか。

こんな話も当時は誰も疑うものはなかった。
カロリーナの糧秣受領は、毎朝暗いうちにソ連人と日

本人（捕虜）の二人が馬車で出発した。アジレニヤ
（本部）のあるソフガワニーの倉庫から受領して来る
とのことであった。

ガラガラと凍土をきしませて一日分の糧秣を積んで
カロリーナの門を入ると、毎日のように誰かが待ちかま
えていて、その荷台に飛び乗り、荷覆のシートをめ
くつて、カチカチに凍った四キロパンをカッパラって
逃げる。

糧秣受領者は大声を上げてその者を取りおさえる。
収容所内をいくら逃げても取りおさえられるに決まっ
ているが、馬車を襲う者は次々と絶えなかった。私も
人が見ていなければキット、カッパラった事であろう。

分遣隊

一九四五年十二月二十八日、この日は忘れられない
想い出の日である。作業現場での昼食中、連絡員が飛
んできて、分遣のためすぐにカロリーナに戻るようにと
の命令で、あわてて戻ると、行く先も告げずに出発だ
と言う。そそくさと身の廻りの支度をして、早速出発
した。

どんな事になるのか考える前に、今よりはなんだか良い事にめぐり会うのではないかという期待にあふれていた。

その頃から空が真つ黒になり細かい雪が覆いかぶさるように降り出した。行進がおけると、「ダワイ、ダワイ」がはじまる。大雪の中を羊飼いに追われる羊のように三時間も歩いて、今度は小道に折れ小一時間も歩くと、そこには二棟のバラークが建っている。

道路づくりのための伐採作業だとの事であった。

しかし、その日はいくら待っても夕食が出ない。八時頃になって鮭の塩汁のようなスープが出たが、腹が空いて寝るどころではない。誰というともなく食糧が届かないということであった。

翌朝も水のようなスープ一杯で作業に出ろという。食うものは食わないで仕事をしろといわれても、気力もなくただスコップや、つるはしを杖に突っ立っているのが精一ぱいであった。

その日は昼も夜も食事が出なかった。ソ連人の係員がアジレニヤ（ソフガワニの本部）へ急拠交渉に出

向いたということは聞いたが、不安の動揺が危機状態となって広がって行った。

そんな中で日本人捕虜の中からソ連人相手の商売人が活躍した。見たところ部落もあまり見当たらないし、ソ連側職員もあまりいないようであったが、どこから、どうして誰と接触したか今もってわからないが、その人を介して毛糸の靴下一足とパン五百グラム、網の風呂敷は女のネックカチーフ用にパン二キロ位になったのである。

私は召集時、家から持って来た純毛ラクダのシャツ上下を雑のうから出してかの商売人に渡すと、軍足（靴下）を片方借してくれと言われ、それをわたして、その後の首尾を待った。二時間程して彼は米五、六合を軍足に入れ、パン一キロ位を持って来た。

私はそのパンを彼に礼として与え、米を貰った。そして隣に寝ているO君にこのことを話し、共同で飯盒炊飯にかかった。先ず雪を入れペーチカに掛けて雪を融かし、その水で米をとぎ、次の水で米を仕掛けた。

ペーチカの上はそれぞれの飯盒がそれぞれの目的で

一ぱいになって上がっている。ちょっと目をはなすとカッパラわれるので、どうしても組にならなければ仕事が出来ないのである。

炊き上がった飯を二人は一飯盒分全部一気に食べ上げた。あのおいしさは、一生忘れられない思い出である。

三十日朝食なし。午後二時すぎ食糧が来たというところで一同が活気づいた。夕方三分のパンとスープの支給を受け、飢餓状態の危機は納まった。

三十一日は大晦日であった。作業に出たが大した作業もなく、凍った道路の幅を整えたり、ツンドラの苔を敷いて平らにしたり、氷が融ければ一度にぬかるような道路であった。

○君はスコップを振るう力がなく、時々突っ立って息をはずませていた。彼はここに来てから顔がむくんで青黒くなり、目のふちに黒い隈ができ、見るからに弱々しかった。

彼はきれいな東京弁で「渡辺さん、俺はもうだめですよ」と行った。「○さん、東京で奥さんが待っていますよ」

すよ。頑張らしましょう。」と言うと、淋しそうにポツリとうなずいたが、私は直感ではてなと思った。

ここ二三日食べる事もできず実に不安定な日がつづいた。しかしソ連邦社会の原則というか「働かざる者は食うべからず」の通り、作業もその通り日々を暮らした。午後三時頃、作業止めの通告があり、今度はまた一〇ハカローナに復帰すべしとの命令であった。私達は、半ばホッとして再び一〇ハカローナの本体へ戻ったのである。その日もまた大雪であった。

○君は本隊に戻ると熱発患者として直ちにソフガワニーの病院へ入院したとのことであるが、その後、私はシベリアの地を転々として作業に就いたが、彼の姿を見かけた事はない。今も元気だろうかと思うのである。

翌日は昭和二十一年の元旦であった。

春遠し

その頃になると、旧日本軍の防寒外套は、汗と泥にまみれ、焚火の飛火で一面に穴があき、見るも無残な姿になっていた。その上に、棄ててあった荒縄を腰に

巻き、例のソーセージの空缶を上部に穴を明け、針金を通してその腰縄に引っ掛けて歩いた。そして一寸小走りをするとかランカランと、あわねな音を立てた。

しかしその缶々は、お湯をわかして呑んだり、春になってからは、野草をゆでたり、カップラった馬鈴薯を煮たり、便利なものであった。

また塩鮭の腹につまった岩塩を炊事場から貰って、ぼろで袋を造りその袋に入れ、外から石でたたいて粉にし、それも腰に下げ、何んでも食べられるものを、塩をつけては食べた。

またその頃から夜間作業がしばしば飛び入り作業となった。

伐採作業が終わり、帰り仕度をしていると、真つ暗な夜空を、ポーポーと赤々と煙突に火の粉を上げて、機関車が十兩位も無蓋車を連結して私達の前にシュューシューと蒸気を吐きながらいつまでも動かない。暫くすると、ブリガジール（作業監督）が無蓋車のバラスを降ろせというのである。

一ぱいに山盛りになったバラスを降ろすには、先ず

囲ってある外板の止めをはずさなければならぬ。止めは細い丸木を削って金具に差してあるだけである。その止めは凍ってなかなか動かない。

気の利いた者が、タポール（斧）のこじりで、たたきあげるのが、なかなか楽でない仕事であった。

ようやく抜きとると、溢れたバラスと一緒に側板が下りる時はねられて骨折したり、甚だしいときは死亡することもあって、誰もその側板開けを嫌がった。今考えると、普通の体力があつたら大した作業ではなかったと思うが、意識しながらも体が意識通りに動かないのである。

また事故の出る伐採作業であった。大きな木を倒す時は、予め倒れる場所を決め、受けを入れて切り込んで行き、そろそろ倒れる頃になると、その附近の者に「倒れるぞ」と大きな声で知らせる。

近辺の者は急いでその附近から遠ざかる間もなく、バリバリと音を立てて大木が倒れる。一面にその樹についた雪が白煙の様に飛散してまことに壮观である。

しかし、その勢いで小枝が折れ飛んで、その小枝が

目につきささり、大事な片目を潰した仲間もいた。また樹の倒れる時点で風向きが変わり間が狂って別の場所に倒れ、その木の下じきになって死んだ者もあった。

何しろ重い防寒服と防寒靴、その上栄養失調の体ではバツと逃げるだけの氣力がないための、みすみすの事故であった。

私は、とかく沈みがちな自分をふるい立たせ空元氣でも出さなければと、無理にかかる口をたいたりしては自分を励まし、また人を励ました。

そして、いろいろな事が通り過ぎて行つた。

それでも三月も半ばに入ると寒さも大分緩みはじめた。日中は道路の水が解け、ワリーンケ（フィルトの防寒靴）の底がしめってくるようになった。

カミーシャ（検査官）

そんな頃、カミーシャが一〇八カローナに来る、という噂が広がった。

カミーシャというのはソ連の検査官の事で、捕虜の生活状態や、健康状態、作業や食事の状態を調べ、ちよつとでも成績が悪いと、ナチャリニクはじめそれ

ぞれの係官が、どこかへ飛ばされるか、甚だしいのは実刑になるそうである。

ソ連側はとたんにそわそわしはじめた。

第一番にデザカメラ（熱氣消毒）で何回も衣類を滅菌させ、それでも不十分という事で、半日作業を休ませて、私達にシラミ取りをさせた。

それから壁やベーチカを真っ白く石灰で塗り直し、床に水をかけ、金網を足に当てて、床をゴシゴシこすって、また水をかけ雑巾でそれをふき取り、床の木地が真っ白くなるまで、ナチャリニクが先頭に立って「チースト、チースト」（きれいにきれいに）と喚きながら私達の掃除の監督をした。

またその日から油のこつてり入った濃いカーシャが食事に出るようになった。

ポロポロになった防寒外套の極端に悪いのはソ連式の羊毛のついた皮のシュエバーが支給された。我々の捕虜の中から専門職の床やさんが選ばれパリックマーヘル（理髪屋）として専属で、バーニヤ（入浴場）で入浴の後髪まで剃ってくれた。

カミーシヤは襟にベタ金の就いた服に勲章を下けた軍人であった。それと一緒にドクトルも同行して来た。

日本のようなお供がある訳でもなく、二人は肩に袋を担いで線路道をタカタカと小走りに来て、収容所の門をくぐった。

ワクター（監視所）の兵隊が、捧げ銃をすると「ズラストエチ」（今日は）と氣がるに答えるのである。日本の偉い人とは全く違うので私たちはビックリした。

そのカミーシヤはゆっくりとバラック内を見廻り、いろいろ調べているらしかった。

一方ドクトルは、各隊別に私達を医務室に入れ、名前と本人を見比べ、どこも診察しないで、いきなり尻の肉をつまんで引っ張り、肉の張り工合で一級、二級、三級 OK（オカ） OΠ（オベ）と決めるのであった。一級は重労働、二級は中労働、三級は軽労働に従事させた。

OKは収容所内で一週間の休養。OΠは療養収容所行きになるのであった。

私は三級となり収容所内の作業に廻される事になっ

た。

【執筆者の紹介】

現住所 新潟県村上市小町一の八

本籍地 新潟県村上市小町一の八

生年月日 大正六年一月八日

入 隊 昭和十九年二月十四日

北方派遣第一一九〇部隊独立混成部隊第

四十一連隊

終戦時の居住地 中千島松輪島

入 隊 昭和二十年九月二十五日

抑留地 沿海州、ハバロフスク州

作 業 建築、鉄道、伐採、道路、農業

引き揚げ 昭和二十四年七月七日

引揚船 信濃丸

上陸地 舞鶴

（新潟県 吉田 忍）